

けやき

第19号 2023年3月10日発行



子どもたちに、確かな力をつけるために

大仙市教育委員会 教育長 伊藤 雅己

コロナ禍でマスク生活が当たり前となり、中学生や高校生からは、「同級生の声を聞いたことがない」「顔がわからないまま卒業する」という話も聞かれるとのこと。学校は、そんな状況にあっても、子どもたちが将来にわたってたくましく生き抜くための確かな力をつけるという大事な役割を担っています。今年度の学校訪問等を通じて、感じていることをお伝えします。

○「自然な姿」で勝負

学校訪問では、黙々と課題に向かう姿、背筋を伸ばして一点を見つめる姿、うなずきながら耳を傾ける姿、自分の考えを堂々と表明する姿など、教室に入った瞬間に驚かされることがありました。こうした姿は、子どもの発達段階に応じた適切な教師の声かけにより定着が図られ、いつの間にか当たり前になるようになった自然な姿だと捉えています。

中学生議会では、自分たちの実践や意見を堂々と表明する姿に圧倒されました。中には、原稿を全く見ずに、正面を見据えて、熱く語る姿もありました。この日のために時間をかけて準備した成果かもしれませんが、声の抑揚や間の取り方をはじめ、立ち居振る舞い等は、日常の積み重ねの成果として無意識のうちにできていた自然な姿ではないかと感じました。

目指す姿が定着するまでには長い年月が必要です。いくらその時のために準備をしたとしても、緊張した時やピンチの時、気が緩んだ時は、本当の姿が出てしまいます。子どもたちのやる気を大事にしなが、発達段階に応じた対応で、1年間、さらには卒業までの長い時間をかけて子どもたちを育てることが大切だと思っています。学校が子どもたちを温かい目で見守り、学校全体の力で自然にできる力を育ててくれる場所であることを願っています。

○大切な人の存在

駅伝ファンが増えているといわれています。その大きな理由は、選手が自分のためよりも、襷(たすき)をつなぐため、次の走者やチームのためにひたむきに走る姿が、人々に多くの感動を与えて

くれるからではないでしょうか。

人は、自分のためよりも、誰かのための方が頑張れるということがあります。自分のためなら手を抜いたり諦めたりしてしまうのに、大切な人のためとなれば、歯を食いしばりながら予想以上の力を発揮するのです。だから、来たるべき日に備え、日々、自分自身を鍛え、高め続けることもできるのです。学校が、子どもたちに大切な人の存在に気付かせる場所、大切な人をつくる場所であることを願っています。

○ふるさとへの思い

厄払い行事や同期会に恩師として招待されることがあります。地元はもとより、全国各地から懐かしい面々が集まってきます。中には、いわゆる転勤族で、こちらに親戚等が住んでいないにも関わらず参加する者も珍しくはありません。たくましく成長し自信に満ちた表情で力強く語る教え子たちの姿に、熱いものがこみ上げてきます。教師冥利に尽きるひとときです。こうした場に多くの者が集まるのはなぜでしょうか。懐かしい人に会いたいのはもちろんですが、ここがその人にとってのふるさとだからではないでしょうか。

ふるさとへの思いは、人、場所、出来事などが複雑に絡み合っつけられていきます。ふだんは意識しない存在であっても、何かのきっかけでふるさとへの思いがわき上がってきます。チャンスがあれば、その思いを形にしたい、行動に移したいという気持ちは、誰しもがもっているのではないでしょうか。一方、子どもたちは、誰かに喜んでもらえた、地域の役に立ったという経験を通して、ふるさとへの思いを深めていきます。大切なふるさとのために、自ら考え、行動することは、結果的に自分自身の力を向上させることにもつながります。「大仙教育メソッド」「大仙ふるさと博士育成事業」「地域学校協働活動」「コミュニティ・スクール」を大事にしたい理由もそこにあります。学校がふるさとへの思いをつくる場所であることを願っています。

改めて感じているのは、学校はすべての人にとって大切な場所であり、保護者はもとより地域や社会から大きな期待が寄せられている存在だということ。教職員の皆様が、御自身の職に誇りをもち、心身ともに元気に充実した毎日を過ごされることを祈念し、巻頭の言葉といたします。



＜中学生議会＞



＜農業体験DAY＞

大仙・美郷不登校適応指導教室「フレッシュ広場」

心の居場所と学びのサポート

大仙市教育委員会事務局 指導主事 菅原 清三

フレッシュ広場では、専任指導員2名、フレッシュカウンセラー2名が在籍し、長期の欠席児童生徒に対して、自己存在感をもち、安心して過ごすことができる「心の居場所」を提供するとともに、次のような支援を行っている。

【学びのサポート】

個別の学習指導や自分に合った計画に沿った学習に取り組むことを通じた学習意欲の喚起

【体験的活動のサポート】

校外学習、スポーツ、制作活動等を実施することを通じた自立心や社会性等の育成

・校外学習

（6月：ラベンダー園 10月：秋田ふるさと村）他

【心のサポート】

指導員やフレッシュカウンセラーによる教育相談やカウンセリングを通じた児童生徒や保護者の悩みや不安の解消

今後とも学校や保護者とも連携しながら、児童生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的自立に向かうような適切な支援や働き掛けを行っていききたい。



<児童生徒作成のリース>

学校生活支援事業

すべての子どもたちの安心と自立

大仙市教育委員会事務局 指導主事 木元 真一

令和4年度、本市では学校生活支援員、学校生活看護支援員、日本語指導支援員、複式学級支援員を約60名配置し、学校の支援体制づくりに役立てていただいています。対象校は20校に及びます。

本事業は、学校生活を送るうえで様々な配慮が必要な児童生徒に対して支援員を配置し、その目的は、個々の実情に応じたきめ細やかな支援を行うことにより教育環境の充実を図ることにあります。実際に、先生と支援員の皆さんの連携によるさりげない様子に見えますが緻密に配慮された支援の数々は、子どもたちの成長に多くの栄養を与えていると感じます。活動に見通しがないと不安を感じる子どもへの安心できる声掛け、勇気を出してチャレンジした子どもが喜びを誰かに伝えたい瞬間を見守る視線など、どれもが子どもたち一人一人が安心して学校生活を送り、「自立」に向かう様子を支援しています。

特別な支援を強くイメージしがちですが、特別支援教育の推進はすべての子どもにとっても、よい効果をもたらすものです。特別支援学級であっても通常の学級であっても、特別支援教育が行われています。すべての子どもたちのための支援体制づくりの一助となるよう大切な事業を行っていきます。

地域学校協働活動「古四王プロジェクト」

地域を受け継ぐ社会参画意識を

大仙市立東大曲小学校 校長 藤倉 欣浩

イオンモールで地域に関する学習の成果を展示して4年目となる。これまでは、歴史に名を残した富樫氏、古四王神社を建てた甚兵衛や古四王神社の素晴らしさを取りあげてきた。地域の良さを見つめる意義ある学習であったが、地域の出来事を自分事として捉え、社会参画意識を醸成するには課題があった。そこで、今年度は学習のキーワードを「受け継ぐ」、内容を「名もなき人々の活動や歴史」と設定し、学習や活動を行った。4年生は古四王フラワーロードを運営する地域の人々の活動、5年生は地域団体「曲陽会」の歴史・活動を題材に学習した。6年生は古四王神社や地域の歴史の学びを基に「450年間受け継いできた地域の人々の活動を、「こんなことあったんじゃないか劇場」として創作劇を作成・上演した。「名もなき人々」を取りあげたことで、地域の出来事や活動を自分事として捉える社会参画意識の高まりが、作成や練習の様子や上演後の振り返りの中に多く見られた。カリキュラムマネジメントによって、視野を地域から社会へと広げられるよう学習内容を編成することが課題である。



<創作劇 シン・古四王物語>

地域学校協働活動「黒土神楽・梵天奉納」

伝承を地域と共に

大仙市立清水小学校 校長 西村 典子

三百年以上の歴史をもつ黒土神楽。地域での伝承が難しくなり清水小の子どもたちによる伝承が始まって34年。1月に行われる八坂神社の梵天奉納は、秋田県で一番古く五百年以上の歴史をもつ。小学生も梵天奉納をすることになって二十数年。これらの活動は、先輩から後輩へと代々受け継がれ、地域の方々に支えられている。地域行事の理解・伝承に向けた学習は、本校の特色といえる教育活動である。



<梵天の地域回り>

梵天奉納前日には、学習会で中仙公民館清水分館長と地域の方に、梵天の回し方・奉納の仕方などを教えていただいた。奉納の日には、地域の郵便局や商店を回った。大きな声で梵天唄を歌い、「ジョヤサー、ジョヤサー」のかけ声を響かせて梵天を披露し、地域活性化の一翼を担うことができた。

中仙地域学校協働本部は、今年度、各校の要望を基に作った人材募集のチラシを新たに全戸配布した。黒土神楽経験者や梵天に詳しい方の応募を期待し、更なる連携・協働を推進していきたい。

部活動指導員配置事業

学校の教育力を高める部活動指導員の配置

大仙市立中仙中学校 校長 渡邊 朋哉

放課後の体育館に、元気な声が響いている。生徒の眼差しは真剣そのもの。部活動指導員との間の信頼関係を感じ取ることができる。

今年度から男子バスケットボール部に部活動指導員が配置された。現在は、顧問の教員と部活動指導員が協力して指導に当たっている。

教員の部活動指導に係る心理的・体力的負担は非常に大きく、部活動指導員は、当該種目の指導経験が少ない教員にとってこの上ない応援団である。また、授業準備や分掌業務のための時間確保にもつながっており、働き方改革の視点からもチーム中仙中学校に不可欠の存在となっている。

部活動指導員の効果をより高めるためには、年間を見通した活動計画をもつことがとても大切だと感じている。年間時数の関係で、試合や大会予定を含めた指導員との綿密な打合せは欠かせない。将来的な部活動の地域移行も見据え、今後効果的な指導員の活用と部活動運営の充実について研究していきたい。



<練習の様子>

心のプロジェクト「夢の教室」

夢の実現に挑戦！

大仙市立花館小学校 教頭 黒澤 紀子

10月4日、5年生を対象に、潟上市出身のプロ冒険家である阿部雅龍氏をお迎えし、11月に再度「白瀬ルート」(本県出身の探検家 白瀬轟さんの足跡)での南極点到達へ挑戦する熱い思いを語っていただいた。

時にはユーモアを交えながら、これまで体験した数々の危険や失敗について話す阿部さんの魅力に、子どもたちはぐいぐい引き込まれ、日常生活にはない新鮮な驚きを感じたようであった。

海外において、言葉の壁を物ともせず、現地の人に助けられながら多くの偉業を達成することができたのは、常に人との関わりを大切に、相手と自分の心の距離を縮める努力をしてきたからだそうだ。

また、「挑戦しなければ失敗はしないが、成功もしない、失敗を恐れずに、積極的に夢の実現に向けて挑戦してほしい」と語る言葉には説得力があり、子どもたちの夢に向かう気持ちに、力強いエールを送っていただいた。



<熱く語る阿部さん>

大仙市中学生サミット

つながりを大切に

大仙市立南外中学校 教諭 杉山 大樹

今年の大仙市中学生サミットに、本校は事務局として参加した。今回のサミットでは、SDGsの視点で捉えた各校の取組を、ポスターセッションの形で紹介しあった。普段の生徒会活動が、SDGsとどのように関わっているのか、また、関連付けてどのような活動を新たに始めたのか、どの学校も工夫された実践報告であり、質疑応答も活発であった。

そんな中、本校の取組を発表したところ、仙北中学校が「シトラスリボンプロジェクト」に関心をもってくれた。その後、両校で話し合い、連携の一環として、学校祭で寄付金を募る活動を行うことができた。地域の方々の協力もあり、集まった募金を両校合同で大仙市に寄付することができた。これもサミットが大事にしている他校との「つながり」であり、有意義な活動ができた。今後も地域を巻き込み、時に他校と切磋琢磨しながら「大仙市の未来は私たちがつくる」という志をもった生徒を育成したい。



<中学生サミット>



<大仙市への寄付>

大仙グローバルジュニア育成事業 (市教育委員会)

大仙イングリッシュ・デー

大仙市教育委員会事務局 指導主事 小田嶋 徹

- 実施日
 令和4年7月20日(水) 中学校1～3年の部
 7月26日(火) 小学校3・4年の部
 7月27日(水) 小学校5・6年の部
- 会場 大仙市大曲交流センター (1F講堂)
- 講師 市外国語指導助手 (ALT) 1名
 国際交流員 (CIR) 1名

■内容
 自己紹介や異文化理解、グループ別活動等外国とのオンライン交流を始め、各ALTがアイデアを練った体と心を揺さぶるアクティビティを笑顔で楽しみました。100名を超える参加希望があり、26日と27日は午前と午後の二部制に日程を変更して、参加希望者全員を受け入れることができました。今後も「楽しさ」を前面に打ち出し、外国語を通じてのコミュニケーションの場を提供していきたいと考えています。



<3・4年生の活動>



<5・6年生の活動>



<中学生の活動>

大仙っ子新聞読もうDAY

自分の思いを言葉で表現
大仙市立豊成小学校 教諭 進藤 静香

児童の思考力・判断力・表現力等の向上のための手立ての一つとして、「新聞に触れ合おう」という活動に取り組んできた。県内の若者のふるさとに対する見方について書かれた連載記事「若者のミカタ」を読んで思ったことや考えたことを書き、それを共有し合う活動である。



<新聞記事を読む児童>

子どもたちは、互いに考えを交流し合う中で、同じ記事を読んでも人によってその捉え方が違うということを感じ取っていた。この活動を継続してきたことにより、内容を読み取る力や考えを書き表す力も身に付いてきている。

また、今年度は、「ふるさと再発見」を総合的な学習のテーマとして豊成地区のよさをPRする学習に取り組んできたため、ふるさとに対する自分たちの見方・考え方を振り返るよききっかけともなった。自分の考えの深まりや変容を知ることができ、思考力・判断力・表現力等の育成に効果的だった。今後も継続し、一層の充実を図っていききたい。

「大仙ふるさと博士育成」事業 (市教育委員会)

親子で発見！ 新しい「大仙」

大仙市教育委員会事務局 指導主事 中山 憲太郎

平成28年度に始まった本事業は、今年度で7年目となった。参加下限学年であった当時の小学校3年生が、現在は参加上限の中学校3年生となっている。また、令和5年3月現在で各級の認定者が延べ1万人を突破した。

夏・冬の特別企画「企業見学DAY」を担当して感じたことに、保護者の反響の大きさがある。日本有数の会社、世界トップレベルの競争力をもった会社が大仙市に複数存在する。そういった会社への訪問では、児童生徒よりも目を輝かせて見学し、また、熱心に質問する保護者の姿が多数見られた。

ふるさとを愛し、地域の将来を担う人材の育成のためには、保護者からの日々の働きかけが欠かせない。今後も、子どもと保護者が新たな発見をし、ふるさと大仙に愛着を深められるような事業を継続していききたい。



<企業見学DAY>

大仙市中学生議会 (市教育委員会)

自分たちの行動で笑顔が広がるまちを
大仙市教育委員会事務局 指導主事 中山 憲太郎

1月11日、3年ぶりに大仙市中学生議会が大仙市役所本会議場で開催された。大仙市の未来を担う中学生が議長や議員となり、市の事業や取組について質問や提案を行った。

今回の中学生議会を見据えた昨年8月の中学生サミットでは、自校の生徒会活動をSDGsの視点で捉え直し、効果が高いと感じる取組を発展・地域展開させていく方法について意見交流した。さらには大仙市企画部総合政策課から講師を招き、「SDGs未来都市選定を受け、大仙市が構想する『Well-beingにあふれ未来に向けて持続発展する田園交流都市だいいせん』」について講話をいただくことで、自分たちの取組と市政とのつながりについて理解を深める機会もあった。



<議場での質問の様子>

そして迎えた中学生議会。各中学校とも自分たちが住んでいる地域や学校での取組と市政に関連付け、資料や写真を提示しながら鋭い質問と具体性のある提案を市当局に堂々と伝えた。質問内容に感じ入った市長が、今回は全ての質問に市長・副市長・教育長が答えることを決定したことからも、中学生の質問がいかにか前向きで建設的なものであったかがい知ることができる。

また、今回初めての取組として、議会終了後に中学生と市議会議員の懇談会が開催され、和やかな雰囲気での交流の場となった。

今回の経験と、ここに至るまでの取組をきっかけとして、行政や議会への理解を深めるとともに、各中学校での様々な取組と地域と連携した活動がさらに活性化していくこと、そしてそれが大仙市全域に広がっていくことを期待している。



<議員懇談会の様子1>



<議員懇談会の様子2>

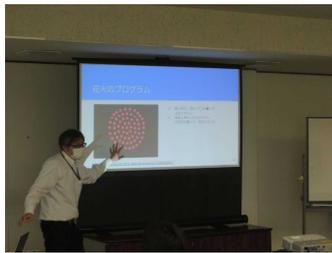
～大仙市中学生議会決議～
私たち大仙市の中学生は、「ふるさと大仙のよさ」を大切に守り続けるとともに、大仙市の未来をつくる主役として、地域の皆さんと力を合わせてSDGsを意識した行動をし、笑顔が広がるまちを創造していきます。

プログラミング研修（市教育委員会）

プログラミングでバーチャル花火！
大仙市教育委員会事務局 指導主事 石塚 史人

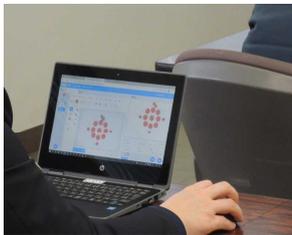
プログラミング教育についての理解を深めることを目的に、秋田県子どもプログラミング教育研究会会長廣田千明氏を講師に迎えての本研修は、今年度で3年目となる。

今年度の研修の目玉は、ビジュアルプログラミング言語「スクラッチ」を使用しての「バーチャル花火」作成である。ブロックを並べるだけで気軽にプログラミングができるので、参加者は自分が思い描いた彩り豊かな花火を次々と完成させていくことができた。実際に、自分がプログラミングした花火がアニメーションとなって打ち上げられ、音と共に夜空に花開いたときは、感動である。



<講師による講義>

このような体験をきっかけに、プログラミング教育が各教科等において推進されていくことが期待される研修となった。



<プログラミング画面>

授業支援ソフト活用研修（市教育委員会）

「MetaMoJi」を体験してみよう！
大仙市教育委員会事務局 指導主事 石塚 史人



<研修の様子>

今年度から本市で導入した授業支援ソフト「MetaMoJi Classroom」の基本的な使い方を体験することをねらい、（株）MetaMoJiの郷内裕行氏を迎えての研修を夏と冬の2回開催した。

研修では、シートへの手書きや文字入力、写真の取り込み、音声の録音、思考ツール、モニタリング活用シートの作成と配付、画面を同期した協働学習とグループ分け等の具体的な演習を行った。

参加者から「操作が分かりやすい」といった声が聞かれるなど、実際の授業をイメージした研修となった。まずはできることから始め、効果を実感しながら各教科等での授業改善へとつなげていきたい。



<モニタリング>



<同期による採点>

第23回環境美化教育優良校等表彰事業文部科学大臣賞受賞 あきたSDGsアワード2022受賞

ESD for 2030「誰一人取り残さない」
大仙市立大曲南中学校 教諭 後藤 高仁

本校では、「SDGsの達成に向けたESDの実践による『生きる力』の育成」を学校経営の最重点としている。今年度新たに実施した取組を紹介する。

○キリバス共和国との交流

国際理解と気候変動学習の一環として、地球温暖化の影響を最も受けやすいキリバス共和国との交流をおして、私たちができることを考えた。日本キリバス協会のケンタロ・オノ氏の講演と、キリバスの中学生とのオンライン交流を行った。生徒は「『誰一人取り残さない』未来にするために、行動一つ一つに意味を込めたい」と語った。



<オンライン交流>

○ワールドピースゲーム（WPG）

ESDの総まとめと位置付けた。四つの国と国際機関等に分かれ、15時間で23のクライシスを解決しつつ、各国の資産も増やすことが勝利条件となるゲーム。複雑に絡み合ったクライシスを交渉と宣言によって解決していく。生徒からは「問題を起こしている国だけでなく、全世界で解決に向けて話し合うことが大切だ」といった声が挙げられた。



<WPGの柱：交渉>

ICT活用

教員のタブレット端末活用の推進を図るために
大仙市立横堀小学校 教諭 板垣 渉

1 タブレット端末活用情報の共有

Teams内に、タブレット端末活用情報ファイルを作成し、単元名、活用方法を随時入力できるようにした。タブレット端末活用が得意な教師もそうでない教師も、効果的な活用方法について情報交換する姿が多く見られるようになった。

2 校内MetaMoJi Classroom研修の実施

MetaMoJi Classroom研修を2回実施し（1回は高梨小との合同）、使い方や実践事例を紹介し合った。リモート授業においても積極的な活用が見られ、タブレット端末活用の意欲が高まった。



<高梨小との合同研修>

3 タブレット端末活用場面の授業参観

研究授業協議会において、タブレット端末活用の効果を視点の一つとして設定し、本時のねらいに迫る効果的な活用方法を探った。また、学習活動の一層の充実を図るために、授業の中でどのようにICT（主にタブレット端末）を取り入れていけばよいのか、ヒントを得ることができた。

Teamsによる業務改善

情報共有・共同編集による業務効率化
大仙市立大曲中学校 教諭 佐々木 吉彦

1 はじめに

GIGA-DAISENネットワークのTeams導入により、1対多のグループチャットが可能となった。本校では分掌ごとのグループを編制し、アプリ連携を活用した業務効率化に取り組んだ。

2 概要

①グループチャットによる即時伝達と情報共有

- ・各校務担当や分掌チーム内の連絡、ファイルの受渡し
- ・スクリーンショットで配付文書、連絡事項の簡略化

②ファイル同時入力・共同編集による効率化

- ・保護者連絡、出張、来校者情報の共有
- ・受賞、ボランティア記録(書式の共通化等)
- ・適応教室の生徒動静確認
- ・他校との日程等の連絡調整

③Formsによるアンケート業務の簡素化

- ・生徒、保護者、職員の評価アンケートの集計時間短縮

3 成果

- ・情報の迅速な伝達と共有(職員室・校長室・事務室他)
- ・打合わせ時間の短縮～生徒への指導時間確保
- ・通信簿や要録等の書式ミス、誤植の減少
- ・印刷担当の負担軽減、印刷諸経費の節約

守りと攻めの防災教育

令和4年度安全功労者内閣総理大臣賞を受賞して
大仙市立平和中学校 校長 三浦 健誠

本校は、「守りと攻めの防災教育」を学校教育の柱に据え、11年間安全教育の推進を図ってきた。

令和4年7月1日「国民安全の日」。首相官邸において、安全功労者内閣総理大臣賞を松野博一内閣官房長官から授与された。(中学校では全国で1校)

本校は生活安全において、生徒主体、保護者及び関係機関との連携により、心の安定と安全な生活環境づくりを行ってきた。また、交通安全では関係機関と連携し、通学路の合同安全点検、自転車利用のルール徹底等、安全の確保と意識の啓発を図ってきた。とりわけ、災害時には、地域に貢献する中学生を目指した「避難所開設訓練」や生命を尊重し、思いやりの心を育む「被災地との交流活動」を令和4年度も継続実施するなど、安全教育の推進に努めてきた。

今年度、本校は創立70周年の記念すべき節目の年に当たる。コロナ禍である今日「継続は力なり」を意識し、この受賞に恥じないよう、地域に貢献できる若者の育成に努めていきたい。



<受賞の様子>

情報モラルいじめ対策事業

情報モラル教室を開催して
大仙市立藤木小学校 教諭 小田島 崇

5月に、南教育事務所の湯野澤指導主事を講師に迎えて情報モラル教室を行いました。家庭での児童のインターネット利用、また、学校でタブレット端末を使った学習が日常化してきたことから、本年度は全校児童を対象とし希望する保護者にも参加していただきました。下学年と上学年の2部に分けて実施し発達段階に応じた身近な事例を取り上げていただいたことで、子どもたちも自分のこととして情報モラルについて考えることができました。

受講後の感想には、「改めてネット利用の危険に気付いた」「相手を傷つける内容にならないように送信前に確かめたい」など、決められたルールの中で正しい判断をしながらしていくことの大切さを感じ取っていました。新年度の早い時期に情報モラルについて学習できたことで長期休業中における教師と児童の望ましい利用について共通理解を図りながら確かめることができました。

来年度は更に多くの保護者への参加を呼びかけ、インターネットの望ましい使い方について共有していきたいと考えています。



<下学年情報モラル教室>

だいせん防災教育「生き抜く力育成」事業

避難所開設訓練～心と情報の環境づくり～
大仙市立中仙中学校 教頭 村田 文子

台風による大雨で齊内川の水位が上昇し地域内支流の氾濫を想定した避難所開設訓練を行った。避難者役としてなかせんワイワイらんの園児にも協力してもらい、より实际的で有意義な訓練を行うことができた。



<園児の受入>

【情報環境づくり】

各部門が同時に情報を共有できるよう生徒用タブレット端末や大型モニターを使用した。また、ドローン撮影を行い避難者の様子や天候状況をリアルタイムで各部門に発信することができた。

【心的環境づくり】

避難者誘導矢印、更衣室、授乳室、充電コーナー、授乳室、相談室、ペットの保護場等、避難者が安心して過ごせるように自分たちでアイデアを出し合い、より快適な環境づくりに取り組んだ。

【災害食の備蓄と試食】

ローリングストック法に基づき、備蓄していた災害食を全校生徒で昼食時に試食した。災害食や保存食を考えるよい機会となった。

校舎は齊内川の隣に建っており、美しい景色と裏腹に危険な一面も持ち合わせている。もしもの時には今回の経験を生かし、一人一人が地域のために力を発揮してくれるものと思っている。

第28回大仙市教職員研究集会 (市教育委員会)

CS導入とICT活用

大仙市教育委員会事務局 教育研究所長 小松 文彦

【ねらい】

大仙市学校教育の方向性を確認し合い、学校の創意工夫をもって児童生徒の夢を育む学校教育の推進に資する。

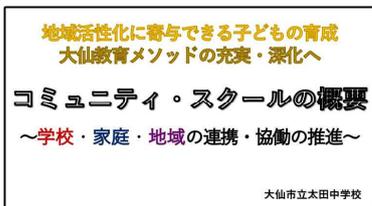
【実施日】 令和4年5月9日 (月)

【実施形式】 オンライン

今年度は、オンライン形式での教職員研究集会の実施となった。

今年度の特色ある取組として、モデル地域である太田中学校長から、コミュニティ・スクール (以下CS) 導入太田地区プランについて発表が行われた。CS推進のカギは、学校が地域住民との信頼を築くことで、学校・家庭・地域がWin-Winの関係につなげていくことが大切だと話されていた。

授業でのICT活用については、学校での実践報告があり、タブレット端末をツールとして使いながら学びを深めていく授業改善の提案があった。



<太田中資料>

コミュニティ・スクールモデル地域

学校に地域の力を 学校が地域の力に

大仙市立太田北小学校 校長 藤原 秀一

本年度太田地域4校は、大仙市教育委員会の指定を受け、市内各校に先がけ、各校で学校運営協議会、地域全体でCS連携協議会を組織し、表題を合言葉にCSとして歩み出した。

【今年度の主なCS活動と地域人材活用の取組】

6月：各校での学校運営協議会

7月：太田地域CS連携協議会

12月：太田地域CS研修会「熟議」

★太田東小学校

稲作学習、フィールドワーク、読み聞かせ等

★太田南小学校

横沢曲がりねぎ、横沢ささら、民謡教室、おやきづくり等

★太田北小学校

全校音楽劇、国見ささら等

★太田中学校

各教科・領域の授業、地域の人から学ぶ講座、学校行事、環境整備等

★4校

地域の特色である花壇づくりと紙風船

来年度は、協議会開催時期の前倒しと開催回数増加、地域への一層の周知のため「CS便り」や「CSカレンダー」の作成と配布、小中の一層の連携を行いながら、CSを機能させた「地域とともにある学校づくり」の推進・充実を図りたい。



<CS研修会 熟議>

沖縄県渡名喜村交流

「絶対に必要な交流なんだ！」

大仙市立高梨小学校 校長 菅原 和仁

2年間実施することができなかった沖縄県渡名喜小学校との交流事業が令和4年11月16~17日に行われました。本校を訪れてくれたのは3名の5年生でした。少々緊張した自己紹介からスタートし、国語ではお互いの方言を学び、社会科では南国と雪国の暮らしを紹介し合うなどして、休み時間も外遊びなどで交流を深めました。

○渡名喜小児童の感想

・高梨小の人たちは何でこんなに仲良くしてくれるんだろうと思った。渡名喜でもこうやって友達をつくっていききたい。

○高梨小児童の感想

・沖縄では、この時季でも半袖、短パンだと聞いて、秋田は寒くてかわいそうだと思った。



<集合写真>

また、教員同士も授業内容について相談したり、授業参観から、お互いに学び合ったりすることもできました。今後はオンラインで「秋田の冬」を配信して、交流を続ける予定です。

「この交流は小さな島の子どもたちにとって絶対に必要な交流なんだ！」と熱く語ってくれた渡名喜村の上原教育長さんの言葉が心に強く残っています。

人権ユニバーサル事業

車いすバスケットボール体験教室

大仙市教育委員会事務局 指導主事 木元 真一

車いすバスケットボール選手との交流、車いすバスケットボールの体験を通して、障がいがある方への理解を深め、相手を思いやり、共生社会へ関心を高めて主体的に行動したりする力を育てることを目的に、体験教室を行いました。

本事業は秋田県地域人権啓発ネットワーク協議会のご協力の下、人権擁護委員の皆様にも参加、協力をいただいています。

体験教室には、11月9日に大曲西中学校の3年生27人が参加しました。秋田県バスケットボールクラブの五十嵐憲男代表の他、3名の選手から、競技者用車いすの基本的な操作方法やルールを学んだ後、ミニゲームを体験しました。

生徒たち自身が車いすを操作する感覚に慣れていくことや、みんな一緒にスポーツを楽しむことの心地よさを味わう様子が印象的でした。

中学生議会にも、障がい者との交流から地域貢献を進める意見を提案するなど、学校全体の意識が高まっています。



<車いすバスケットボール>

働き方改革

学校閉庁日について

大仙市教育委員会事務局 教育指導課長 **大阪 瑞穂**

1 学校閉庁日設定の状況

今年度も本市教育委員会では、「教職員の業務改善推進計画」の施策において長期休業中に学校閉庁日（※令和2年度まではお盆閉庁日）を設定し、実施した。ここ数年の学校閉庁日の期間は、次のとおりであり、段階的に日数を増やしている。

	夏季休業中	冬季休業中
※令和2年度	3日(8/13~15)	設けていない
令和3年度	3日(8/13~15)	平日1日(12/28)
令和4年度	5日(8/11~15)	平日3日(12/27, 28, 1/4)

学校閉庁日が設定されることになった経緯は、「2021教職員が実感できる多忙化防止計画」における「重点項目①時間管理・時間意識の徹底と教職員の健康保持」のための取組の一つに「長期休業中の学校閉庁日の設定」が示され、県教育委員会から市町村教育委員会への取組依頼があったことによる。

具体的には、夏季休業中は5日以上（週休日及び休日を含む）、冬季休業中は原則、平日3日以上（年末年始を除く）が求められている。

また、これまでの教職員の無制限無定量の勤務実態や休暇が取りづらい環境が背景となっており、これらの改善につながっていく取組であると認識している。

2 業務改善推進計画のフォローアップ

「令和4年度教職員の業務改善推進計画」を踏まえたフォローアップアンケートを市内全ての小・中学校に実施したところ、「閉庁日の設定・期間」の項目において、自校の業務改善推進に効果が見られたかへの回答は次のとおりであった。

	効果あり	やや効果あり
令和3年度	76.7%	23.3%
令和4年度	83.3%	16.7%

全ての学校において肯定的な回答が得られており、昨年度と比較しても効果があった。年次休暇取得日数増加への波及効果も見られ、休暇を取得しやすい環境に整備されてきたことがうかがえる。また、フォローアップアンケート記述において主な記載は次のとおりであった。

- ・学校閉庁日の拡充によって気兼ねなく連続した休暇の取得が可能となった。
- ・計画的な休養やリフレッシュにつながっている。
- ・管理職も休みやすくなった。
- ・冬季休業中に学校閉庁日があったことで、年末や年始に締め切りがあった報告書類の作成が慌たしなかった。
- ・学校閉庁日と部活動の関係について共通理解が十分でなかった。

3 今後に向けて

学校閉庁日の設定は、働き方改革の取組として成果があると捉えられる。一方、課題としては年度始めに市教育委員会が学校閉庁日を学校、保護者等にしっかりと周知していく必要がある。また、教職員には学校閉庁日を踏まえた計画や職務遂行が求められると思う。

将来的にであるが、統一の学校閉庁日を設けなくても、気兼ねなく年次休暇等が取得できる職場環境が望まれる。

手洗い教室

手洗いでバイバイ菌！

大仙市太田東小学校 校長 **小松 完**

3・4年生の児童25名を対象に行われた手洗い教室。コロナ禍のこの3年間、手洗いや消毒が日常になり、こまめに行っている子どもたちからは、「私の手はきれいです」という声が多く聞かれていた。

大曲保健所と大曲食品衛生協会の皆様の指導のもと手洗い教室が始まり、バイキン計測器（ルミテスター）による手に付いているばい菌の数を計測した。ばい菌の数は数千から1万ほどが計測され、子どもたちからは、「うわ〜」という悲鳴にも近い声があちらこちらで上がっていた。手洗いの仕方を教えていただき、指先から爪の間まで丁寧に洗った結果、ばい菌の数は驚くほど減少し、全員が手洗いの効果を実感した。



<手洗い教室の様子>

また、事後のアンケートは、「手がきれいだと思っていたらばい菌がたくさん付いてびっくりした」「手洗いの大切さがわかった」という感想がほとんどだった。まさに「百聞は一見にしかず」、今後も手洗い教室の継続をお願いしたい。

令和4年度 教育研究所のあゆみ

- 1 大仙市教職員研究集会
 - 第28回大仙市教職員研究集会 (R4.5.9)
 - ※オンライン配信
- 2 GIGAスクール活用推進研修
 - ◆研修A「授業支援ソフト活用研修」
 - ①R4.8.16 ②R5.1.6
 - ◆研修B「プログラミング研修」
 - ①R4.8.5 ②R4.12.26
 - ◆研修C「情報モラル研修」
 - ①R4.8.5
- 3 学校訪問
 - 前期訪問：R4.6.21~10.4
 - 後期訪問：R4.10.19~12.21
 - ・全ての学校でタブレット端末を活用した授業を提示
 - ・新型コロナウイルス感染症対応として、一部の学校で日程を変更して実施
- 4 GIGAスクール推進
 - 大仙市学校教育情報化推進委員会
 - ・市内30校の管理職で組織
 - ・推進委員会及びシステム部会等をオンラインで実施